

地域包括ケアに関する取組み

東区

○概況

令和5年3月末現在

【人口動態、地形、生活環境等の地域特性】 東区は市内で最多の人口で、増加傾向は継続。多々良川や三日月山、海の中道など豊かな自然に恵まれる一方、アイランドシティや千早・香椎駅周辺、九大箱崎キャンパス跡地など新しいまちづくりが進み、若い世代の転入も多く、校区の違いがある。また4つの大学があり、学生も多い。 【高齢者の状況（高齢化率や介護保険受給者状況）】 高齢化率は、50%を超える校区がある一方、5%程度の校区もあり地域差が大きい。 【社会資源（介護サービス事業所や医療機関、地域コミュニティの状況）】 丘陵地の校区や市営住宅・県営住宅等の大規模団地が多い校区では、高齢世帯が増え、地域での担い手不足が課題。地域によって取り組みも異なり、介護サービス事業所等数が少なく、オンライン診療でも通信障害が生じることがある校区もある。事業所ネットワーク14か所。東区全域をカバーし、地域での連携進捗状況は異なるが、熱心に取り組まれている。	人口（人）	311,001
	高齢者数（人）	71,638
	高齢化率（%）	23.0
	小学校区数	30
	いきいきセンター圏域数	11

○地域包括ケアに関する現状と課題

○医療・介護：新型コロナ感染症が継続する中、留意しながら、多職種連携研修会を1回ハイブリット、2回を対面実施。そのうち1回でグループワーク実施。顔を合わせての実施のメリットを再認識できた。その他専門職毎での勉強会、連絡会もハイブリットで開催や対面を工夫しての開催が行われた。今後も会議、研修会、職種間の交流も開催方法を工夫し、コロナで中断した関係づくりを再構築していく必要がある。

入退院連携の場面では、まだ直接の院内面接に制限がある中での、連携支援は難しく、WITHコロナとなった以降、改めて関係づくりの再構築が必要。

○市民の認知症高齢者への理解：「まず実際行動にうつす」「若年層にも関心を持ってもらう」きっかけづくりとしての、認知症サポーター養成講座、認知症声かけ訓練を事業所ネットワーク、LSW（認知症ライフサポートワーカー）と協働して広めていく。今後は「認知症高齢者が安心して暮らすことができるまちづくり」のために、地域（大学含む）と事業所ネットワークが直接つながる機会として実施できるよう、認知症ライフサポーターと協働して展開していく必要がある。

○生活支援・保健（予防）：医療・介護・地域のネットワーク推進をめざし、27年度から4つのブロックごとの医療・介護・地域の連携会議を、元年度までに全ブロックで開催。コロナの影響で、ブロック支援病院、事業所ネットワークの活動が縮小・休止となり、今年度は事業所ネットワークは状況を見ながら再始動を行ってきた。今後改めてブロック支援病院、事業所ネットワークの関係づくりに向けて働きかけていく必要がある。

1. 令和5年度取組みの中で、特徴あるもの

取組内容

(1) 認知症に関する理解促進を目的として、認知症ライフサポーターを中心とし、医療・介護の専門職、大学との連携による①大学生向けの認知症に関する講座の開催②地域と事業所ネットワークを結び付けた認知症声かけ訓練③啓発及び必要な情報収集等に役立つホームページ「東区認知症オレンジちゃんねる」区ページによる情報発信を引き続き実施。

大学での
認知症声かけ訓練



声かけの様子
(参加者、認知症役)



事業所ネットワーク交流会



「地域とつながるきっかけ作りで工夫・心がけていること」「今後NW活動を継続していくために必要なこと」等をテーマに情報交換。

訓練実施後の振り返り

(2) 医療・介護・地域の連携強化を図るため、

- ① 6つのブロック支援病院間での情報共有・意見交換の場を企画・実施する。
- ② 事業所ネットワーク活動の活性化、相互の協力体制の構築、地域との連携強化を目的に、交流会等の機会を企画・実施する。

(3) 健康寿命の延伸を目指し、高齢者が身近な場所で主体的に運動に取り組む場として『よかトレ実践ステーション』の登録推進を図るとともに、よかトレの指導者として養成した専門職のボランティアである「よかトレ実践ステーションサポーター」の活動を推進する。



(4) 令和4年度に引き続き、区内小学校の協力のもと、成人女性を対象に、ナッジ理論を活用したロコモの普及啓発（東区ロコモ啓発実証事業）を実施する。

片足立ちで靴下が
はけるかな？

できないあなたは要注意！
もしかしてロコモかも？



2. 令和4年度の取組状況

(1) 地域ケア会議の状況

① 個別支援における成功事例、課題など（個別支援会議の傾向など）

【検討内容】認知症がある単身生活の方、障がいがある家族へも支援が必要な方、キーパーソン不在等、支援が必要な事例の会議を開催。ケアマネや事業所の他、警察、区障がい者基幹相談支援センター等にも出席を依頼、世帯全体の課題解決に向けた連携を行っている。

個別支援会議開催状況・会議回数：166回（うち介護予防型個別支援会議33回）

② 住民同士の助け合い・支えあい活動

◎ 事業所ネットワーク「ひがし綾の会」出張カフェ開催



月1回開催の認知症カフェの拡大版として、出張カフェ「かふえ まいペース」を公民館で開催



博多高等学校看護専攻科の学生11名が血圧測定等のお手伝い

◎ 認知症になっても住みやすい校区を目指しプラン作成



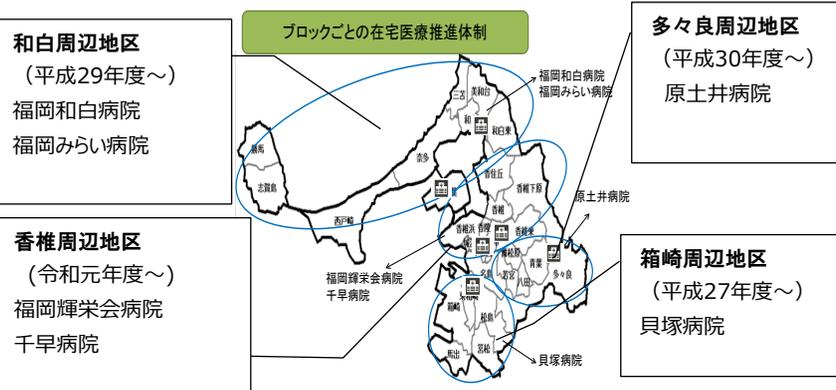
認知症の対応を若い世代に体験してもらう仕組みづくり。

認知症声かけ訓練の振り返りで把握した「こんな取組みがあつたらいいな」をプランとして作成

高齢者地域支援会議開催状況
 ・会議開催校区（地区）数10校区（地区）、延べ回数：11回
 ・検討内容：高齢者の実態・課題について意見交換し、地域で高齢者を支えるための解決策検討、取組み開始

③ 在宅医療・介護連携や多職種連携の推進に向けた取組み

1 ブロック支援病院・事業所ネットワーク・地域との連携



区内を4ブロックに分け、ブロック支援病院が地域・医療介護専門職との連携を図り、つながっていくことを目指し、各ブロックごとに地域連携会議を開催してきたが、取組み状況には差異が生じている。令和3年度、活性化のためブロック支援病院の交流を計画していたがコロナの影響で延期。令和4年度は改めて各ブロック支援病院を巡回。令和5年度に交流会を開催予定。

2 令和3年度に引き続き、いきいきセンターふくおか、ケアマネ東、区の共催で「身寄りの無い高齢者の支援」をテーマとし、ハイブリット形式での研修会を実施（80人参加）。

圏域連携会議開催状況
 ・会議回数：4回
 ・「認知症高齢者を地域で見守りたい」「SOSを発見できる町～高齢者支援の気付きと見守り」等をテーマに実施

④ 区レベルの取組み（特徴ある取組み）

グループホーム（GH）管理者からの包括が相談を受け、令和4年度、東区GH情報交換会を企画、開催。GH職員の交流の機会となった（区内29GH中、17事業所参加）。この会を機に連絡会を発足。令和5年度は定例会を計画、自立した会となるよう支援予定。

区地域包括ケア推進会議開催状況
 ・区地域包括ケア推進会議：1回
 ・部会 ①在宅医療・介護部会：1回、②権利擁護部会：1回、③生活支援・介護予防部会：1回
 ①の部会でテーマとした「ACP」については、考えることの慣れる機会を増やし、重層的に取り組む体制づくりが必要として、市推進会議に報告した。

(2) その他、在宅医療・介護連携の推進に関する取組み、事業所ネットワークの活動等

取組み	具体的内容
多職種連携研修会	東区医師会、福岡東在宅ケアネットワーク、東区保健福祉センターの共催で開催。ハイブリット形式、対面等で開催（3回、計339名参加）。
市民向け在宅療養シンポジウム	地域住民のための東区在宅療養シンポジウム2022「ピンピンコロナが難しい人生100年時代の生き方」「人生会議のイロハ」（1回、129名参加）
同一業種による連絡会への出席 ①訪問看護 ②小規模多機能 ③グループホーム	①②コロナ禍で対面による連携が困難であったが、オンライン・電話等により医療や介護連携に関する情報提供や課題の確認、家族の会への支援を行った。 ③令和4年度に連絡会発足。
事業所ネットワーク	・福祉施設・介護事業所・医療機関などがネットワークを組んで横の連携を図るとともに、地域貢献として、出前講座・学習会の開催、健康サロン・カフェの支援、買い物支援、会食会の送迎、認知症声かけ訓練支援、認知症カフェの開催などに取り組んでいる。 ・令和5年3月末現在、14団体が結成され東区全校区のカバーがなされている。
よかトレ実践ステーション登録推進	R4年度末現在30校区、127か所を創出している。
東区ロコモ啓発実証事業	①ナッジ理論を用いたロコモ啓発リーフレットの作成・配布（区内小学校等、約2万枚） ②ロコモに関するイベント開催（来場者数：2,740人）